

大正十二年三月

## 東京府史蹟勝地調査報告書 第二冊

〔武藏國分寺址の調査〕

東 京 府

### 序 言

史蹟名勝天然記念物の調査保存は國民性の涵養上尤も重要なり。特に吾國の如き光輝ある歴史を有し天然の恩恵に富める國民はその歴史を物語る史蹟と天恵に頼れる名勝天然記念物との保存によりて精神修養に資すべきこと勸少ならず。歴史は祖先の文化活動の記録にして史蹟はその文化活動の舞臺なり。是を保存な愛護することによりて愛國の精神を涵養し祖先の文化を理解すべきなり。

本府に存する武藏國分寺址は現存國分寺址中規模尤も雄大なるものにして大正十一年十月内務大臣より史蹟の指定を受けたり。今回之が實地調査を遂げ其の結果を報告し以て史蹟保存の主旨を徹底せんとす。

大正十二年三月

東 京 府

# 東京府史蹟勝地調査報告書 第一冊

## 「武藏國分寺址の調査」

### 本文目次

第二、沿革	
甲、徳川幕府時代以前	一頁
乙、徳川幕府時代	六頁
丙、法流及信仰	九頁
第二、遺址	四二頁
甲、大塔址	一四頁
乙、金堂址	一七頁
丙、北院址	二二頁
丁、西院址	二四頁
武藏國分寺址踏査報告書、	三三頁
第三、遺物	三一頁

### 圖版目次

第一	國分寺附近地圖、(二萬分之二)
第二	國分寺遺址概観地圖
第三	(一) 大塔址礎石配置圖
十八	(二) 大塔心柱礎石
第四	金堂、講堂僧房址礎石配置圖
第五	(一) 金堂址礎石配置圖
十八	(二) 講堂址礎石配置圖
第六	(一) 推定鐘樓址礎石配置圖
十八	(二) 僧房址礎石配置圖
第七	北院址概観
第八	(一) 南大門址
十八	(二) 北院址礎石配置圖
第九	(一) 西院址礎石配置圖
十八	(二) 西院址土塔圖
第十	遺址瓦分布圖
第十一	重田定一氏國分寺礎石概観

- 第十二 (一) 國分寺本堂及山門
- (二) 同 藥師堂
- 第十三 (一) 大塔址礎石(中央心柱石)
- (二) 同 上 (右端寶篋印塔)
- 第十四 (一) 金堂址礎石
- (二) 同 上
- 第十五 (一) 講堂鐘樓址礎石
- (二) 僧房址背後土壇
- 第十六 (一) 僧房址礎石
- (二) 遺址一望
- 第十七 (一) 北院址礎石
- (二) 同 上
- 第十八 (一) 仁王門
- (二) 西院址(金佛堂)
- 第十九 (一) 西院址(鐘撞堂)
- (二) 同 上礎石
- (三) 西院址礎石及青石塔婆

- 第二十 (一) 藥師大門
- (二) 西院址下蘆街道
- 第二十一 (一) 國寶藥師如來摩像
- (二) 寺 額
- 第二十二 (一) 正中三年青石塔婆
- (二) 應安七年青石塔婆
- 第二十三 (一) 國分寺藥師堂額朱印
- (二) 武藏國府中國分寺碑記
- 第二十四 (一) 相原窯址
- (二) 同 上
- (三) 大丸窯址
- 第二十五 遺址發見巴瓦(1、2)
- 第二十六 同 上(3、4、5、9)
- 第二十七 同 上(6、14)
- 第二十八 同 上(7、8)
- 第二十九 同 上(10、11、12)
- 第三十 同 上(13、15、16、17)

ことにもつて當時の靈場たること擧げて歎ふべからず。數千の大石武藏野にゐること不思議に至なり、まことに人力の及ぶ所にあらず、諸堂の礎の石末世に覆す事なかれ云ふ。

建武二乙亥秋七月日、武州國分寺釋仙快謹書。

第一遺址

武藏國分寺遺址ハ北多摩郡國分寺村大字國分寺ニ存在ス。ソノ遺址ハ面積甚ダ廣大ニシテ、凡ソ東西六町半、南北五町ノ間ニ亘リ、丘岡平野ニ跨リテ分布ス。之ヲ現在礎石ノ分布ニヨリテ大別シ、左ノ四區ト爲シテ説明セントス。(第一圖版及第二圖版參照)

甲、第一區劃 大塔址

乙、第二區劃 金堂及講堂、僧房址、南大門址

丙、第三區劃 北院址(假定)

丁、第四區劃 西院址(假定)

甲第一區劃ノ大塔址ハ心柱石ノ存在ニヨリテ之ヲ確認シ得ベク、乙第二區劃ノ金堂、講堂、僧房址南大門址ハ大塔址ノ位置ヨリシテ姑ク之ヲ推定セリ、丙第三區劃及丁第四區劃ノ北院址、西院址ニ至リテハ今説明ノ便宜ニヨリテ、假定スタルモノニシテ確實ニ認許スベキ根據ナシ。

甲、大塔址

大塔址ハ國分寺村小字前野ニ在リ。天平ノ詔ニヨリテ七重塔ヲ建立セラレ、後承知十二年再建セラレタル塔ノ遺

址ナリ。現今畑ノ中ニ礎石十個ヲ存シ、内心柱石一個アリ。此ノ所土地少シク高ク土壇ノ形ヲ成セリ。第一列ニ三個、第二列ニ四個、第四列ニ二個ヲ存シテ、第三列ハ全部取除カレタリ。(第三圖版(一)參照)

各礎石ノ距離ハ各中心間ニ於テ(2)ト(3)ノ間二十二尺二寸、(3)ト(4)ノ間十尺七寸、(2)ト(5)ノ間十尺五寸、(4)ト(8)ノ間又十尺五寸、(9)ト(6)ノ間二十二尺五寸ナリ。即チ礎石四個配列ノ兩端ノ間各三十三尺ナルコトヲ知ルベシ。即チコノ塔ハ天平尺ニ於テ中間十二尺、兩端間各十一尺ノ柱間ナリシヲ知ル。礎石ノ大サ何レモ徑三尺五寸以上五尺五寸位迄ノモノニシテ、極メテ堅キ安山岩ノ上部ノ扁平ナルヲ用ヒタリ。十個ノ内第(10)ノミハ發掘セルモ他九個ハ原位置ニ安定セリ。

心柱石(1)ハ長サ八尺四寸幅五尺五寸ノ巨石ニシテ中央ニ圓キ穴ヲ穿テリ。穴ノ大キサハ直徑二尺三寸五分、深サ一尺五寸底部徑二尺一寸アリ。心柱石及其他二三ノ礎石ハ火ニ罹リマタ農耕等ノ爲メ一部分破壊セラレタルモノ、如ク、表面ニ缺ケタル跡ヲ存セリ。此ノ邊一帶ニ瓦片多ク散在ス。(第三圖版(二)參照)

新篇武藏風土記稿及ヒ江戸名所圖繪ニ國分寺層塔址ヲ載ゲテ、國分寺ノ東南一町餘ノ所ニ平石一枚アリト記シ風土記稿ハソノ石ノ「大さ大抵四尺に五六尺許り、中心圓穴あり、徑一尺深さ四尺餘、是古へ七層塔の礎石にて圓穴は心柱の穴なるべしと云ふ」ト載セ。名所圖繪ニ「一方九尺ばかり六角に礎を置きたり、往古其塔の中心を收めたるものなりとて、中徑三尺ばかり、石にて疊みたる空穴ありて、内に水をたへたり」ト記セリ。之ヲ現今ノ心中礎石ニツイテ考フルニ甚ダ其ノ形體ヲ異ニス。思フニ往昔ノ心柱石ハ、現在心柱石ノ上ニ更ラニ一ノ大蓋石ヲ据メテ之ヲ掩ヒ、下部礎石ノ心柱穴ノ中ニ佛舍利ヲ安置シ。上部蓋石ノ圓穴ニヨリテ塔ノ中心柱ヲ支ヘタルモノナルベク、而シテ其ノ心柱蓋石ハ後世除キ去ラレタルモノナルベシ、之ハ現今ノ心柱礎石ガ他ノ礎石表面

ヨリハ約一尺五寸許リ低ク、而モ彼ノ武藏野話ニ石切戸ノ名ヲ出セルニヨリテ考ヘラル。武藏野話二編卷三ニ元弘ノ亂に灰燼となり、今はわずかに薬師を安置する堂一字と寺のみにして、往昔伽藍の基も田畑の間に埋れ、五層の塔の基は今に存して、此の寺の東南二町程に石切戸と云へる小地名の残れるは、塔の内にありしと見えて丸き長さ石のありしを村中人々その石を斬りて石臼とせしより、石切戸の地名ありと云ひ傳ふト云へルハ、曾テ是寺礎石ノ一部分ガ土人ニヨリテ持チ去ラレシコトアルヲ示スモノナリ。

其後明治三十六年重田定一氏國分寺礎石ヲ踏査セラレシ時モ、此ノ心柱石ハ土中ニ埋没シ居リテ石ノ大ナ、圓穴ノ有無等一切見ルヲ得ザリシ由ヲ、古蹟第二卷ニ載セラレタリ。

明治廿五年、當寺住僧亮泰ハ村民ト相談リテ寶篋印塔ヲ造リ。大塔址礎石(4)ノ上ニ之ヲ建ツ。蓋シ明治維新以後、荒草ノ地タリシ當地ヲ開墾セシ旨ヲ記ス、高サ八尺許リ、銘文左ノ如シ。

(寶篋印塔銘) 武藏國北多摩郡國分寺村醫王山最勝院國分寺者、人皇四十五代聖武天皇天平年間、令海國創建靈刹也。故稱勸願所、當初規模宏大、結構壯麗、七堂伽藍、金碧輝耀、巍然爲武野之名場矣。世遠星移、至中世屢罹三兵燹、殿堂悉歸烏有、雖建造時竣功、世運不復、輪奐不及、往昔之萬一焉、然千載之下、存其名蹟於今日者、豈非聖恩之餘澤哉。東南二町許有荒廢之地、傳云五層塔跡也、此地明治維新地區改正之際、分附近民家、因開墾爲耕地、爾來往往不詳怪異不レ一、蓋塔地崇障之所、致也、村民恐怖者久矣。於是附近之民相謀喜捨淨財、乃就塔跡、經寶篋印塔一基。標善陽千不朽。仰秘密神咒之功用、以鎮地靈、護不祥、欲使鄉土民生浴百世之法澤焉。頃日信徒來請予銘、因述其事蹟概略、系之以銘、銘曰、聖恩未盡千載下、靈地猶存不測神、一基法塔永表信、密咒前生寶光新、信正亮泰撰文、本多謙軒書。

塔ノ心柱石ヲ去ル事三十間餘ノ西方ニ當ツテ墓地アリ、杉等ノ雜木ヲ生ズル中ニ礎石二個ヲ存セリ。各中心ヨリ六尺ノ距離ヲ保チ而モ内一個ハ發掘セラレタル形跡アリ。明治三十六年頃ハ此處ニ六個ノ礎石ヲ存ジテ内五個ハ東西一例ニ並ビ、一個ハソノ列ヨリ七尺ノ北ニアリシ由ナルモ、現今他ハ皆撤去サレテ只二個ヲ餘スノミ、大キキ四尺ニ二尺許リノ石ナリ。或ハ歩廊等ノ礎石ナリシカト思ハルレド確カナラズ。

乙、金堂、講堂、僧房址村南大門址

(1) 金堂址

金堂、講堂、僧房ノ遺址ハ國分寺村字八幡前ニアリ、東西七十間、南北五十間ノ一平而内ニ所在ス。(第四圖版參照) 金堂址ノ礎石ハ同區劃内ノ南方ニ偏シテ散在シ通稱小字ヲ古堂ト云ヘリ。現今麥畑及ヒ草原ノ内ニ礎石十九個ヲ存シ、周圍土地少シク隆起シテ即チ土壇ノ跡ヲ示セリ。最南端ノ第一列ニ六個、夫ヨリ北ニ向ツテ次ノ第二列ニ四個、第三列ニ三個、第四列ニ二個、第五列即チ最北端ニ四個アリ。(第五圖版(一)參照)而シテ各礎石間ノ中心距離ハ第一列ニ於テ(1)ト(2)ノ間十三尺五寸、(2)ト(3)ノ間十七尺、(3)ト(4)ノ間十九尺五寸、(4)ト(5)ノ間三十九尺七寸、(5)ト(6)ノ間十七尺五寸ナリ。第五列ニ於テ(16)ト(17)ノ間十三尺五寸、(17)ト(18)ノ間十七尺、(18)ト(19)ノ間十九尺六寸、南端相對シテ同シ距離ヲ保テリ。第二列ニ於テ(7)ト(8)ノ間十三尺五寸、(8)ト(9)ノ間十七尺、(9)ト(10)トノ間ハ約九十尺ナリ。而シテ西端ニ於テ(1)ト(7)トノ間十三尺五寸、(7)ト(11)ノ間十五尺五寸、(11)ト(14)トノ間十五尺五寸、(14)ト(16)ノ間十三尺五寸ナリ。即チ金堂ハ七間四面ノ建物ニシテ、柱間ハ天平尺ニシテ東西ハ十四尺、十七尺五寸、二十尺、二十一尺、二十尺、十七尺五寸、十四尺。南北ハ十尺、十四尺、十六十六尺四寸、ナリ。礎石ノ大イサ大抵四尺ニ三尺位ノ石ニシテ堅キ安山岩ナリ。内ニテ(8)及

ビ(15)ノ如キハ尤モ大キク六尺ニ四尺ノ大キカラ有ス。而シテ礎石中樞火風雨或ハ耕作等ニヨリテ破壊腐欠セルモノアリテ(1)(10)(11)(19)ノ如キハソレガ爲メニ其ノ形甚ダ小サク(5)ノ如キハ大部分土中ニ埋没シテ只表面ノ一部分ヲ表ハスノミナリ。

礎石(5)(6)(10)(13)ノ附近ハ瓦片積シテ塚ヲナシ、永年ノ間土壌之ニ交リテ雜草、茅、小笹等繁茂シ、中ニ松樹一本生ヒ立テタリ。ソノ餘ノ部分ハ麥畑ニ化シテ中間一筋ノ道路ヲ通ゼリ。

明治卅六年ノ重田氏調査ニヨルニ、金堂礎石ノ西端ヨリ更ラニ西ニ當ツテ十四尺ヲ離レテ一列ニ四個ノ礎石アリテ、各礎石間ノ距離、北ヨリ三十二尺、八尺、八尺ノ位置ヲ保チ、而シテ礎石埋没シテソノ大イサ知ル可ラズト云ヘリ。然ルニ現今ハソノ一列ノ礎石ハ一個ヲモ止メズ除キ去ラレタリ。故ニ夫ハ如何ナル建築ノ礎石ナリシカ今考フルニ由ナシ。(第十一圖版參照)

(口) 南大門址

金堂址ノ正南方百二十間ノ道路上ニ、瓦片推積シテ一高地ヲ爲セリ。是レ即チ南大門址ナルベシ。明治初年ノ頃、コノ附近ニ礎石四五個ヲ存シタレドモ、農民等發掘シテ持去リテ今ハ一個ヲモ止メズ、然シテ現今コノ道路ハ金堂址ヨリ南大門址ヲ過キテ正シク南方ニ通シ、約十四五町ニシテ府中ニ達ス。是レ即チ往昔國分寺ト武藏國府トヲ連絡セル大道ニシテ、今尙ホ里人農耕等ノ際ノ往復スル所ニシテ、稱シテ藝師大門ト云フ。現今幅員六七尺ノ通路タリ。(第八圖版(一)參照)

(ハ) 講堂址

金堂ノ北端ヲ去ル此方十八間ノ所ニ一群ノ礎石散在セリ。各礎石散布ノ全面積ハ東西二十間、南北十二間ノ内ニ

シテソノ數、凡テ十個、一系ヲ形成シ居レリ。(第五圖版(二)參照)

西方南端ニ(1)(2)(3)ノ三礎石各五尺五寸ノ距離ヲ保チテ東西ニ一列ニ存シ、極メテ安定ニシテ移動ノ跡ヲ見ズ。礎石(4)ハ(3)ヲ去ル十尺ノ北方ニアルモ一度發掘セラレタルモノニシテ位置ヲ論スル能ハズ。礎石(5)ハ(1)ヨリ此方二十三尺五寸ノ距離ヲ隔テ、安定ニシテ移動セズ。礎石(6)ハ(1)ヨリ更ラニ此方二十六尺五寸ノ距離ニアリテ安定ナリ。即チ(3)(4)(6)ハ南北ニ一列ニ配置ス。

(6)(7)(8)ノ三礎石ハ東西ニ一列ニ並ビ、(6)ト(7)トノ間、三十四尺五寸、(7)ト(8)トノ間二十三尺六寸アリ。共ニ安定ニシテ移轉發掘ノ跡ヲ見ズ。礎石(9)ハ(8)ノ正北二十六尺五寸ノ距離ニアリテ又移轉ノ跡ヲ見ズ。(10)ハ(9)ノ東方四十尺三寸ノ所ニアリテ現位置ヨリハ二尺許リ北方ニ動セル者ト認メラル。

重田定一氏明治三十六年ノ調査ニヨレバ、如上拾個ノ礎石ノ外ニ更ラニ六個ノ礎石ノ存在シタルモノ、如ク、即チ礎石(6)ノ北方約二十八尺九寸ノ所ニ一個(イ)アリテ(8)(4)(6)ノ延長直線上ニ位シ、(7)ノ北方約三十尺ノ所ニ一個(ロ)アリテ前者ト(9)(10)トヲ連ネタル一直線上ニ位ス。更ラニソノ延長上(10)ノ東方ニ一個(ハ)ヲ存シソノ間十二尺ヲ隔ツ。又(10)ノ南方四十尺ノ所ニ一個(ホ)アリテ西方(5)ト東西相對セリ。更ラニ(6)(7)(8)ヲ東ニ延長セル線上ノ(8)ヨリ約七十尺ヲ隔テタル地點ニ一個(ニ)アリ。(8)ト(ホ)トノ中間位ニ一個(ヘ)ヲ存シタリト云フ。而シテ現今之等ノ六個ノ礎石(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)ハ移轉カレ或ハ除去カレテ原位置ニ存在セズ。即チ之等モ亦同一建築物ノ礎石ト認メ得ベシ。是等礎石ノ大イサ(1)(2)(3)(4)ハ小サクシテ二尺ニ二尺五寸位、他ハ可ナリ大キクシテ三尺ニ三尺五寸ノモノナリ。

ソノ礎石間ノ距離ヨリ考フレバ或ハ金堂以上ノ大建築物ニ非リシカト想像セラル。(第四十一圖版參照)

講堂址ノ礎石(1)ヨリ西方六十二尺ヲ隔テタル畑中ニ一群ノ礎石散在シ、東西二十尺、南北五十尺ノ範圍ニアリテ、現今五個ヲ殘セリ。(第六圖版(一)參照)

礎石(1)(2)(3)(4)(5)皆共ニ安定ノ位置ニアリテ、(1)ト(2)ノ間十四尺、(1)ト(3)ノ間三十尺四寸、(3)ト(4)ノ間二十一尺、(2)ト(5)ノ間三十八尺、(2)ト(4)ノ間二十二尺五寸ノ距離ヲ保チ、而シテ(1)ト(3)ト(4)トハ直角ニ位セリ。礎石ノ大サ何レモ三尺ニ二戸五六寸ノ大イサニシテ火災ニ罹リテ損シタル跡アリ。

重田氏明治三十六年ノ調査ノ折ハ此外ニ更ラニ二個ノ礎石アリテ合計七個ヲ存セリ。(3)ト(4)トノ中間ニ一個(イ)ヲ存シ、(1)ト(4)トノ交ハレル直角點ニ一個(ロ)アリ。

此ノ一群ノ礎石ハ二間二面ノ小建物ノ存在セシモノト思ハル。而シテ講堂ヲ採ンデコレ等ノ礎石ト相對スル東方約四十七間ノ所ニ礎石一個極メテ安定ノ位置ニ存在シ、東西相對セリ。之ニヨリテ考アルニ東方ニモ同様ノ建築物存在セシモノ、如ク、或ハ鐘樓、鼓樓ノ如キ者ノ遺址ニ非ザルカト想像セラル。彼ノ唐招提寺、大安寺ヲ講堂前方兩側ニ鐘樓、鼓樓東西ニ相對シテ存在スルト同一形式ナリシナラン。(第四圖版參照)

講堂址ノ北方、十三間ノ一段低地桑畑中ニ礎石三個アリ。而シテ三個ノ礎石ハ共ニ位置變動シ、ソノ距離モ、二十五尺五寸二十八尺ノ距離ニテ何等位置ノ連絡ヲ得タズ。恐ラクハ後世他ヨリ移轉シタルモノト推測セラル。其内一個ノ礎石ノ如キハ路傍ニ傾斜シテ移動ノ跡歴然タリ。而シテ其ノ地表面ハ前ノ講堂、金堂等ノ地表面ニ比シテ四五尺ノ低地ナルヲ以テ是等礎石ヲ同一建築ノ連絡ト思惟スル能ハザルナリ。(第四圖版參照)

### (三) 僧房址

講堂址ノ正シク西方ニ當リ、講堂西端礎石(1)ヨリ二十間ノ所ニ一群ノ礎石アリ。ソノ所ハ畑及ビ墓地ニシテ中ニ小笹等生ヒ茂リタリ。礎石群ハ是等ノ中ニ埋没或ハ隠掩サレテ散在シ、其ノ面積、東西十一間、南北廿四間ニ亘ル。(第六圖版(二)參照)

礎石ノ數全部十六個ヲ存スルモ後世墓地等ノ建設ノ爲メニ發掘移轉サレタルモノ、マタハ礎石上ニ直チニ墓表ヲ立テタルモノ等アリテ其ノ配列極メテ雜然タリ。礎石ノ中(1)(11)(13)(14)(16)ハ安定ニシテ移動又ハ發掘ノ形跡ナク、(3)(5)(6)(7)(8)(9)ノ如キハ發掘移動サレタル跡歴然タリ。(2)(4)ハ礎石ヲ應用シテ墓表臺石トナシタルモノ、如ク、(10)(15)ノ如キモ稍少シク移動又ハ損傷シタルモノト想像セラル。礎石(10)(11)(12)ハ東西一直線上ニ位シ(10)ト(11)トノ間二十四尺、(11)ト(12)トノ間三十六尺八寸ヲ隔ツ、(13)(14)亦東西ニ相並ビ其ノ間二十二尺一寸ヲ隔テタリ。(13)ト(11)トハ南北ニ相對シテ其ノ間二十一尺一寸アリ。(11)ヨリ南方五十九尺三寸ノ所ニ(4)アリ。(16)ハ(10)ノ北方四十尺ノ所ニアリテヤ、東方ニ偏セリ。礎石ノ大イサ大概二尺五寸ニ三尺位ニシテ破壞損傷セルモノ割合ニ少ク、附近一帶ニ古瓦ノ散布甚々多シ。

重田氏調查ニハ此一群ノ礎石ノコトヲ記載シ居ラズ。各礎石ガ墳墓又ハ竹笹叢中ニ隠掩セラレタル爲メ注意セラレザリシモノ、如シ。

此ノ僧房址及ビ講堂址ノ北方ハ一ノ堤塘ヲ爲シ夫ヨリ一段ト低クナリソノ高低ノ差四五尺ニ達シ、而シテ其ノ長サ東西凡ソ八十間ニシテ一直線ニ講堂、僧房址ノ背面ヲ爲ス、恐ラクハ是レ土壇ノ遺址ナルベク、後世ソノ土壇ニ瓦片等ヲ堆積シテ以テ益々其ノ高サヲ增加セルガ如シ。

丙、北院址(假定)

講堂址ヲ去ル北方四十間ノ丘上ニ數多ノ礎石散在セリ。コノ丘上ニハ現今仁王門、藥師堂、鐘樓等建チ並ビテ礎石ハ其周圍ノ雜叢又ハ林間ノ内ニ散布ス(第七圖版參照)

礎石ハ總計四拾六箇ヲ算スレド、其大部分ハ後世丘上ニ八十八所靈場及ビ二十三所觀音石像ヲ安置スル際ニ移動シテソノ臺坐ニ用ヒタルモノニシテ殆ンド原位置ヲ存セズ、多ク小徑ノ兩側ニ在リ。然ルニ仁王門ト鐘樓トノ間ニ於ケル丘上ノ一平地ニ存スル數箇ノ礎石ハ何等發掘移動ノ形跡ナク、極メテ安定ノ位置ヲ保テリ(第八圖版(二)參照) 礎石(1)(2)(3)ハ南北ニ一直線ヲ爲シテ並ビ、各礎石ノ間十五尺五寸ヲ算シ、(3)(4)(5)ハ又東西ニ一直線ニ並ビ、(3)ト(4)トノ間十八尺五寸、(4)ト(5)トノ間三十九尺アリ。即チ(4)ト(5)トノ間ニ於テ一礎石ノ存在シタリシヲ知ル。而シテ邱上ニ於テハコノ附近古瓦ノ破片著シク散布セリ。之ニヨリテ考フルニコノ所ニハ少クトモ三間二面カ又ハ四間三面ノ堂宇ノ存在シタリシコト明ラカナリ。

從來國分寺址ヲ研究セル者ハコノ丘上ノ礎石ヲ深ク注意セズ、凡テノ礎石ヲ皆下方ヨリ移轉シ運ビタルモノナリト考ヘ居タリキ。是レ諸國國分寺址ヲ見ルニ、平地ヨリ山上ニ亘リテ遺址ノ存スル者甚ダ稀ニシテ、而モ當國分寺ノ如ク、數多ノ大建築ヲ見ザルガ爲メタルベシ、然ルニコノ丘上ニモ堂塔ノ遺址アリト主張セラレタル鷲尾順敬氏ハ大正九年十一月、本府囑託高橋源一郎氏、内務省囑託栗田常憲氏ト共ニ踏査セラレシ結果、邱上ノ多數ノ礎石ノ内數箇ハ全ク安定ニシテ明カニ堂塔址タル事ヲ確メラレタリ。

新篇武藏風土記稿ハ國分寺址ニ關シテ、コノ邱上藥師堂裏ノ林中ニ四十九箇ノ礎石一群ヲ成シテ存在シ、各石ノ間四步毎ナリト記載セリ。之ニヨレバ、現今藥師堂ノ北方ニ更ニ一堂址ノ礎石排列セシ如ク考ヘラル。然ルニ現今

藥師堂裏ニハ約十五箇ノ礎石極メテ亂雜ニ散布シテ、ソノ内九箇ハ一所ニ密集セリ。而シテ各石ハ發掘移動ノ跡歴然トシテ到底原位置ヲ保持スル者ニ非ズ。

現今ノ藥師堂方寶曆六年頃ニ當寺住僧賢盛ノ努力ニヨリテ建立セラレタル時ハ、幾分山上ノ礎石ヲ運ビ用ヒ又ハ舊礎石ノ上ニ堂塔ヲ建築シタルノ如ク、ソノ藥師堂下ノ各礎石ヲ見ルニ舊礎石ト思ハルル物數箇アルヲ認ム。然レバ現今藥師堂ノ所ニモ又別ニ一宇ノ堂ノ存在セシヲ想像セシム。即チ山上少クトモ二字ノ佛堂ハ存セシナルベシト思ハル、其他鐘樓、仁王門ノ礎石モ亦舊礎石ヲ用ヒタル者ノ如ク之等諸堂建築ノ際山上ノ遺址ヨリ持チ去リタルモノト考ヘラル。

(新篇武藏風土記稿ノ多摩郡卷四、國分寺條)

藥師堂、堂ノ後背平林中ニ往古ノ礎石アリ。四步毎ニ一ツ凡七石アリ。土人ノ考ニ遺礎ノ様子ヲ以テ按ズレバ往古ノ堂ハ大抵二十八間四方モアリシニヤトイヘリ。

(御遊漫錄) 藥師堂邊、礎七ツ、一ツ宛ノ間凡ソ三間半、推考フルニ、三七貳拾壹間四面ノ堂、昔ノ本堂ノ跡ハ今藥師堂ノ邊ナルベシ。

藥師堂ノ丘國ニ連レル東方約五町ノ所ニ瓦片散布スル一區域アリ、現今國分寺驛ヨリ宇國分寺村落ニ入ル右方ノ丘上ニシテ杉等生ヒ立テリ。小字ヲ多喜窪ヒ云フ、礎石等ハ今一個モ存在セザルモ以前ハ三四個存在セル者ノ如ク、附近ニ散在セル瓦片ハ他ヨリ運搬セシ者ニ非ズ。後ノ鐘樓ノ礎石遺址ヲ西院ト推定セバ、コノ所ハ東院ニ相當ス。承和ノ頃當寺ニ中院ノ稱アルヲ見レバ東院、西院ノ存在セシヤモタ知ラズ。然レドモ何等其ノ存在ノ證トスベキモノ無クレバ、今且テ疑フ存シテ置クノミ。(第一圖版及第十圖版參照)



丁、西院址(假定)

金堂僧房址ヲ去ル西方三丁半ノ丘上ニ一群ノ礎石散在シ、古瓦及磚ノ破片甚シク散布セリ。此附近ハ國分寺村字黒鐘ト稱シ、又ハ黒鐵トモ書シ俗ニ金佛堂ト呼ブ。古ノ鎌倉街道ニ臨ム。邱岡ハ國分寺藥師堂ノ邱岡ト連絡セル邱ニシテ雜木繁茂セリ。近時之ヲ開墾シテ桑畑ト爲シ、礎石ハ桑畑ノ中ニ點在セリ。(第九圖版(一)参照)

現今礎石ノ存在セル者五箇、内二箇ハ風雨農耕等ノ爲メニ破壊シテヤ、小サクナレリ。而シテ其位置距離等甚ダ亂雜ニシテ何等對角的位置ヲ保タズ。各礎石間ノ距離、(1)ト(2)ノ間八尺五寸、(2)ト(3)ノ間二十一尺、(3)ト(4)ノ間二十二尺五寸、(4)ト(5)ノ間十五尺アリ。而シテ之等現在礎石ノ外ニ、最近發掘シ去ラレタリト推定シ得ベキ回穴ノ箇所四所(イ)(ロ)(ハ)(ニ)ヲ存ジ、現存礎石トノ距離、(イ)ト(1)ノ間九尺、(1)ト(ハ)トノ間二十九尺、(ハ)ト(3)トノ間二十五尺、(ハ)ト(ロ)トノ間十四尺、(4)ト(ニ)トノ間十八尺、(5)ト(ニ)トノ間十七尺アリ。是等ノ各礎石ハ其位置對照甚ダ亂雜ニシテ往時建築物ノ構造ヲ考フルヲ得ザルモ、周圍ノ狀況ヨリ推シテ大體、間口十間、奥行五間位ノ建築物ノ存在セルトヲ想像シ得ベシ。

コレ等礎石、及ビ古瓦、磚等ノ現今國分寺諸堂址ノ物ト同一形式ノ物ナルヨリ推シテ、コレノ所ニモ又何等カノ堂宇ノ存在セシ事ヲ推定スベク、而シテ夫ハ國分寺ニ關係アル佛堂ナリト考アラ至當トス。然シテ之等礎石ヲ包圍シテ三方ニ土壇ヲ形成スルヲ見ル。即チ、南西北ノ三方ニ周リ北ト南ハ各十四間、西ハ二十三間ノ長サニ於テ、礎石所在地表ヨリ約四尺ノ高カラ有シテ圍繞サレタリ。コレハ、即チ塀ヲ築キ、土壇址ニシテ、コレノ堂ノ左右後方ヲ圍メリ。堂ハ東面ニシテ往時ノ鎌倉街道ニ面シ、道路ニ降ル口ハ今モ尙ホ階段的傾斜ヲ成セリ。村内古老ノ話ヲ聞クニ、明治三十六年、村社八幡神社殿ヲ再建ノ際、コレノ所ヨリ多數ノ礎石ヲ運搬シテ社殿ノ礎ト爲セリト云フ。即

チ社殿ノ下ヲ見ルニ寺塔礎石ト思ハ、石ヲ用ヒアルヲ見タリ。コレノ八幡社ハ藥師堂西方ノ隣地ニ存シ。元國分寺ノ鎮守ニシテ、彼ノ東大寺ニ於ケル勸講字佐八幡トソノ意義ヲ同フジ、古クヨリ國分寺ニ附屬セシモノナリ。維新ノ際分離ノ結果、村社トナレリ。即チ當堂址ニモ最近マデ多クノ礎石ノ殘存セルヲ知ル。

是クノ如ク三方ニ塀ヲ有スル一建築物ハ、即チ之ヲ以テ一院ト認ムルヲ得、而シテ夫レハ國分寺ニ關係ヲ有スル西院ナルベシ。

往年此ノ地點ヨリ青石塔婆數十個ヲ發見ス。卒木阿彌陀ノ種字ヲ刻セリ、大正十年礎石發掘調査ノ際、正中三年ノ三尊來迎圖、應永七年ノ彌陀三尊種字ノ青石塔婆ヲ發見ス。

サレバコレノ堂宇ガ淨土教信仰道場ナリシカト思ハル。

コレノ邱地ノ南方二丁ノ所ニ一帶、雜木地アリテ雜草生ヒ茂レル中ニ、古瓦磚等類シク散布シテ中ニ壹個ノ礎石現存ス、國分寺村字黒鐵ニ屬シ土人呼ンデ鐘撞堂ト稱ス。又コレヨリ西方十五間ノ通稱富士塚ト云フ桑畑中ニ一箇ノ礎石アリテ土中ニ埋没シ居レリ。恐ラクハ附近ヨリ移動サレタルモノナルベシ。古老ノ説ヲ聞クニ明治初年尙コレノ附近ニ三四箇ノ礎石存在セシガ、後玉川砂利鐵道敷設ノ時邱地ヲ破壊シテ畑トナスニ際シ他ニ移轉サレタリト云フコレノ附近一帶ノ古瓦、磚等全ク西院址ノモノト同一ニシテ、之レマタ何等カ國分寺關係ノ建築物ノ存在セシヲ示セリ。

新纂武藏風土記稿ハ、コレノ土地ヲ以テ群應寺跡ト呼ブト記シ、現今府中町善明寺ニ存スル國寶建長五年ノ鐵佛、阿彌陀坐像ガコレノ所ヨリ掘出セルモノト云ヘリ。字ヲ黒鐵ト稱シ、又土人呼ンデ金佛堂ト云フハコレノ故ナルベシ。

太田南畝ハ調布日記ノ中ニ、戀ヶ窪ノ道場畑ノ右ナル阿彌陀殿ノ所ヲ以テ、鐵佛阿彌陀坐像ノ存在セシ所ト云ヘ

り。鐵ケ窪ト黒鐵ト相隔ヘルコト僅カニ三四町ナリ、或ハ傳ヲ誤レルカ。

武藏名所圖繪ハ、コノ地ヲ以テ國分尼寺即チ法華滅罪寺ノ跡ナリト推定セリ。然レドモ固ヨリ確タル根據ナシ。タ、武藏國分尼寺ノ遺址ト認ムベキモノマダ發見セラレズ、而シテコノ推定西院址ガ國分寺附屬ノ一院トシテハ可ナリニ規模ノ大ニ過グル點ヨリシテ或ハ武藏國分尼寺ニ非ルカトノ疑ヲ存ゼシムルモノ無キニ非レドモ、何等之ヲ證スル根據ナキヲ以テ、今ハ且ラク疑問ヲ存シテ後ノ調査ヲ待ツノミナリ。

(新篇武藏風土記稿卷四) 國分寺村ノ條

黒鐵村ノ西ニアリ、府中六所ニ、アル所ノ鐵像ノ彌陀ハ昔此谷ヨリ掘出セシモノナリト云フ、此所ノ丘林ヲ、祥源寺蹟ト呼ブ、コノ地モ舊跡ト見ヘテ古瓦ヲ多ク掘出シテ散亂ス、國分寺ノ瓦ト一樣ノモノナリ云々。

(同上) 六所社ノ條

鐵佛一軀、彌陀ノ坐像ナリ、長七尺餘覆屋アリ、此ノ鐵佛國分寺ノ舊物ナルベシト云フ、其ノ故ハ國分寺ヨリ一工程西南ノ谷ヨリ掘り出シタル後コノ社地ニ移セリト云フ、其谷ヲ鐵谷ト云ヘルモ此ノ佛出デシ故ナルカ云々。

(武藏名所圖繪) 卷三、府中領、總社六所宮ノ條

鐵佛彌陀堂右ニ出セル鐵像ノ彌陀佛ハ一説ニ國分寺ノ舊物ナルベシトモ云其謂レニ國分寺ヨリ一町餘西南ノ方ニ野林アリ、其邊ヨリ掘出シタル社地ヘ移セリト、此ノ佛ノ出デシ邊ヲ土人黒金ト呼ベリ、又其ノ邊ニ國分寺ノ古瓦ト同ジキ古ノ瓦アレバ、或ハ古ヘノ法華寺跡ナルヤト云々。

コノ推定西院址通稱金佛堂ノ東隣地ニ一ノ方形墳的封土アリ、金佛堂ト舊街道ヲ挾ンデ相對ス。土地ハ藥師堂ノ

丘岡ト相連リテ雜木林ヲ爲シ、封土ハ高サ約十尺、直徑六間ヲ存ス方錐形ノ頂ヲ削レル如クニシテ、後世頂部ヲ發掘セシ跡アリ、附近マダ古瓦片ヲ散布ス。是レカノ奈良ノ頭塔、大隅ノ隼人塚、ニ類似セルモノニシテ、國分寺ニ關係ヲ有スル一種ノ土塔ト認メラル。コノ附近ハ古代民族居住ノ地ニシテ遺物ヲ包含スルコトアレドモ未ダ古墳ノ存在セシヲ見ズ從ツテコノ封土ノ或ハ古墳ニ非ルカトノ疑ナキニ非ズト雖モ、通常古墳トハヤ、趣ヲ異ニス。而シテ之ト同一形狀ノモノ之ヨリ西方三四町ノ所ニ更ニ一個存在シテ富士塚ト稱セラル。富士塚ハ高サ約十五尺、直徑五間ノ方形塔ニシテ現存丘岡ノ麥畑中ニ獨立セリ、土人ノ稱シテ富士塚ト云フハ其ノ形狀ヨリ名ケタルモノナルベシ (第一圖版×、第九圖版二)參照)

武藏國分寺址踏査報告書

東京府史蹟名勝天然記念物調査囑託 鷲尾順敬

大正九年十一月七日東京府囑託高橋源一郎氏と共に、武藏國分寺遺跡を踏査して研究したる結果左の如し。武藏國分寺の史蹟に關しては、屢々學者の踏査を経たり、順敬亦數回實地に就いて礎石等を調査したり。然るに今回礎石數個を發見し、前數回調査したることを參照し、大に發明するところありたり。新篇武藏風土記稿に、此の礎石の位置に關して少しく疑を存す。然れども、この礎石の位置に關しては、一點の疑なし、塔の心柱石、及び他の礎石數個、極めて安定の狀にあり。當時の大塔の建築物を想見するに足るなり。